小児看護 1 月号　第 48 巻第 1 号（通巻第 601 号）　2025 年 1 月 15 日発行（毎月 1 回 15 日発行）
ISSN 0386-6289

小児看護 1

THE JAPANESE JOURNAL OF CHILD NURSING, MONTHLY

Vol.48 No.1 JANUARY
2025

外来看護師の技を引き継ぐ

特別寄稿

医療的ケア児・重症心身障害児とその家族，
看護職・看護学生との交流イベント

【前編】家族と訪問看護師，それぞれの視点からみた在宅生活

へるす出版

連載

心が歌えば、世界が揺れる

佐藤聡美 Sato Satomi
聖路加国際大学公衆衛生大学院准教授

第42回 くるり紅白

紅白餅，紅白幕，紅白饅頭。皆さんはお正月にどんな“紅白”を見つけただろうか。新年の祝いには欠かせない紅白の色合い。私たちの生活の中で，紅白という色は「おめでたい」「幸せ」「繁栄」など，ポジティブな意味合いを持つ象徴として広く親しまれている。

私は最近，少し異なる形の紅白に出会った。それは駅にある図書館の展示コーナーで見つけた。その展示は，ジャンルや著者に関係なく，ただ表紙の色だけで本を並べたものであった。赤い本の棚と白い本の棚が入口に作られ，静かに新年の祝福をしていた。

図書館と言えば，通常，私は本を題名や著者名にしたがって並べるものだと思い込んでいたため，装丁の色だけで本を並べるという発想には驚いた。それでも，その展示はなんとも美しく，圧倒されるものであった。普段は気づかないような，小さな工夫で新年を祝っているその空間に，私は「こんな紅白があったのか」と少し心を動かされた。そして，なぜかその瞬間，2025年は良い年になる予感がしてきた。

NPO法人エゴノキクラブが主催する「エゴノキワークショップ10」という小児がんの子どもたちとその家族を支援するための講演会も，新たな気づきをもたらしてくれた。今回で記念すべき10回目の開催となるこのワークショップでは，ソーシャルワーカー・社会保険労務士・弁護士などの専門家たちが集まり，重要な情報を提供してくれる。しかし，毎回悩まされるのは，このワークショップ運営のための人手の問題である。

そこで，私は思い切って，小児がんの子どもたちからスタッフを募集してみた。すると，小学生から大学生までの5人の子どもたちが申し込んでくれた。全員がエゴノキクラブのミントグリーンのTシャツを着て，それぞれの業務を行った。指先に麻痺がある子にはペンを使う受付ではなく，講師の案内を頼んだ。複数の指示を覚えるのが難しい子には，机と椅子の移動を担当してもらった。明るく快活な子には，エゴノキクラブの活動紹介をしてもらった。こうした工夫を通して，子どもたちの個性や能力を最大限に活かすことができ，最終的にはワークショップを成功裏に終わらせることができた。

私はワークショップが終わったその瞬間，心から子どもたちに「ありがとう」と伝えた。そして，子どもたちも「働くのは楽しかった」と感想をくれた。ハンディのある人と働くときに最も大切なことは，雇用する側が「雇ってやっている」という態度ではなく，「助けられている」という実感を持てることだと改めて感じた。私はその実感を，子どもたちとの協力を通じて深く味わうことができた。

紅白という二色の組み合わせが幸せや繁栄を象徴するように，ハンディのある人とハンディの少ない人の組み合わせが幸せを生み出す。助ける側と助けられる側は，いつ何時も場面によってくるりと入れ替わるのだから。

佐藤聡美
さとう・さとみ
聖路加国際大学公衆衛生大学院准教授。博士。臨床心理士，公認心理師。NPO法人エゴノキクラブ理事長。富山県出身。米国のBellevue Community Collegeを卒業後，お茶の水女子大学大学院修了。国立成育医療研究センターにおいて小児がんの臨床と研究に携わる。お茶の水女子大学特任講師を経て，現職。著書『看護師と家族でかなえる最高のサポート：子どもの入院から就学・就労まで』。工作好きな一児の母。令和4年度大谷賞（日本小児血液・がん学会賞），第41回とやま賞受賞。

©へるす出版